# 心に記された律法と文字で書かれた律法

２０２３年2月１０日
西九州伝道所
佐々木正明

## 二つの律法

使徒パウロは聖霊の啓示を受けて、人間には二つの律法が与えられていると、教えています。（ローマ 2：12－16）これらの律法は、同じ天地の創造主から与えられたものであるために、その根底に流れている精神、あるいは理念はまったく同じですが、与えられた事情と目的、それから場所や対象もことごとく違うために、随分と異なったものとなっています。

最初に与えられたのは、パウロが「自分自身が自分に対する律法なのです」と語り、また、律法の行いが彼らの心に書かれていることを示しています」と説明した、律法です。この律法について、パウロはこの場ではこれ以上の説明はしていませんが、聖書全体を読み、神学的に考察すると、これは人間が造られたときに与えられた、神に似た性質、神に似せて造られた姿であると考えられます。人間は神に似せて造られた時、神に似た性質をその本性として与えられ、その本性が人間の生活のすべてを律する掟、律法となったのです。

従って、この律法は人類すべてに普遍的に与えられたものであり、人間が人間として自意識を持つ以上、必ず、この人間の本性に従って、生を営むようにされているのです。またこの律法は、人間の理解を必要とする理性によるよりも、むしろ本能的な直観、あるいは情緒によるところが大きいものです。その本能的な情緒は、まず、人間の霊性という面に現れてきます。

すなわち、霊であられる創造主に似せて造られた人間は、霊的な動物として造られたのです。単に生物学的に生きる動物ではなく、神の霊的性質に似た性質を与えられた動物として、特別に造られたのです。このような動物はほかに存在しません。それが人間の特質、人間だけに与えられた性質なのです。人間が神に似た霊的性質を持つということは、いろいろな深い意味を持ちますが、最も大切なのは、霊であられる神とコミュニケーションが取れる、心

を通じ合わせることが出来る、交わりを持つことが可能であることです。

人間の特質の第一は神を感じ（理解するのではなく）神を認め、神を崇め、神を畏れ、神を礼拝し、神に感謝し、神に信頼して生きる生き方を、善いと感じることです。つまり、人間とは神の存在を感じ、その存在を前提として生きる動物なのです。人間は初めから神を感じ、宗教を持つ動物なのです。

人間の特質の第二は、神の善い性質を与えられていることです。聖書が神は愛であると教えているように、神は愛に満ちた存在で、すべてが善い性質のお方です。正しいことを喜び、優しいことを喜び、公平を喜び、愛し合うことを喜び、助け合うことを喜び、他者のために尽くすことを喜びます。人間はそのような神の善良さに包まれて生き、神の性質に似た善良さを発揮しながら生きるのです。このように神を神として崇め、善良さを発揮しながら生きていたのが、堕落前の人間の姿です。

**堕落と死**

人間が罪を犯して堕落し、悪魔の支配に陥った後には、人間は罪の力と悪魔の支配に縛られて、その特質を充分に顕わすことが出来なくなってしまいました。とは言え、創造のときに基本的な性質として与えられた人間性は、全く破壊されてしまったのでも、消滅してしまったのでもありません。完全には機能しなくなっただけであり、まだまだ、機能し続けていたのです。

とは言え、罪を犯して悪魔の軍門に下り、悪魔の支配を受けるようになった人間は、神との霊的なつながりを断ち切られ、霊的命の流れを絶たれてしまいました。幹から切り離されてしまった葡萄の枝が、幹からの命を得ることが出来なくなり、やがては死んでいくように、霊的動物しての霊の側面は、死んでしまったのです。そして、人間は自分の努力では再び命を得ることが出来ないように、ケルビムと回る炎のような剣で、命の木に至る道をふさがれてしまったのです。それは命の源である神の許に、帰ることが出来なくなったことの、象徴的な表現です。この時から人間は、神を離れた状態で悪魔の支配、悪魔の国で生き、その中で家庭を作り、社会を作るように定められたのです。それは生物学的には生きていたとしても、神に似た霊的生物としてはすでに死を宣告された状態でした。たとえ、神に似せて造られた人間の本性はまだ機能し続けていたとしても、そういう状態で生を受けた者は、完全な善であり、完全な聖さを性質としておられる、神の目からご覧になると、すべて死んで生まれて来たものであり、生ける屍として生まれてきたものなのです。

そういう訳でキリストは、一度だけ生を受けてこの世に生まれてきたものは、すべて、も

う一度生まれ変わらなければならないと教え、新しく生まれること、あるいは上からうまれることを、強くお勧めになったのです。（新しくと訳されている言葉は、上からと訳すこともできます。ヨハネの福音書全体では「上から」と訳すのがふさわしいのですが、この個所だけは、「新しく」と訳して、はじめてニコデモとの会話の意味が通じるため、新しくとなっています。ヨハネは言葉遊びをしたのでしょう。）それは、悪魔の支配の中、悪魔の国の中に生まれるのではなく、神の支配の中、神の国に生まれることでした。それはまた、悪魔の支配から呼び出されて、神の国に入れてもらうことであり、悪魔の国から召し出されて、神の国に召し入れられることでもありました。それは人間の力によらず、聖霊の力によって神の許に帰してもらうことであり、再び神の命に繋がり、死んでいた命を生き返らせてもらうことでした。さらにまた、罪と悪魔の支配により、半ば死にかけていた人間の本来の姿、神に似せて造られた美しく、善良である姿を取り戻すことでもありました。神の国に生まれ直した者は、本来の人間の美しい性質を、再び輝かせることが出来るようになっていくのです。

　とは言え、罪を犯して神の御許から追放されてしまった人間は、神との交わりを絶たれて生活をしていたために、たちまち神の御姿を忘れてしまいました。愛の神は罪を犯してご自分の許を離れてしまった人間にも、最低限の守りと導きを与えておられましたが、人間は、坂道を転がるように、どんどん堕落の速度を速めてしまいました。その堕落の勢いは、偶像礼拝という形で現れてきました。人間はたとえ堕落の後でも、その本性を活かして感じ、考え、神に造られた多くの物、自然の被造物を通して、神の永遠の力と神性を理解し、見えない栄光の神を見えないがままに、触れることが出来ない無限の神を触れないがままに、礼拝して行けたはずなのです。ところが、すっかり愚かになった人間は、見えない不滅の神の栄光を、滅びゆく人間や鳥や動物などの像に変えてしまったのです。

　それで神は、人間をその愚かな欲望に任せてしまわれたのです。その結果人間は同性愛を始めとした不道徳に陥ったばかりか、多くの罪に身を任せ、とんでもない社会を作りあげることになってしまったのです。聖霊の啓示を受けたパウロは、そのこともはっきりと語っています。（ローマ 1：18 - 32）

　その偶像礼拝の罪は、人間の第二の堕落とも呼ばれるべき結果をもたらしました。そしてますます激しい退廃の社会が生まれてきたのです。ノアの洪水の出来事も、バベルの塔の出来事も、その成り行きの中の出来事です。また時代が下って起こったソドムとゴモラの滅亡もその一つです。

**文字で書かれた律法**

ところが、このように堕落してしまった人間を、神は深く愛し続け、罪の結果の滅びと、罪と悪魔に支配された生活から、人間を救い出そうとされたのです。それが愛である神の性質です。人間の限られた思考力で考察すると、神は人間の堕落を見て驚き悲しみ、愛と正義によって反応し、その人間を救おうとされたかのように、時系列的に理解しがちですが、無限の能力をお持ちの神に取って、時間もまた神の支配の中にあり、神は天地創造の前から人間の堕落を予知し、それを救う計画を立て、さらにキリストの贖いの死によって、遂行しようとしておられたのです。

文字で書かれた律法、すなわち旧約聖書は、このキリストの犠牲を通しての救いを確立するための、手段の一つだったのです。神は痛ましく堕落した諸部族の中から、ヘブル民族に属するアブラハムの家系を選び、この家系をご自分の特別な配慮の下に育て上げ、神の全人類の救いの働きのために、用いようとされたのです。ヘブル民族に、あるいはアブラハムの家系に、神に気に入られる特別な資質があったかどうかは不明です。とはいえ、堕落しきった多くの小民族の中で、ヘブル民族、特にアブラハムの家系の中には、いくばくかでも、天地創造の神を認める要素があったのかもしれません。しかし、アブラハムの家系が選ばれたのは、すべてを知っておられる神の、一方的な選任と言うべきと思われます。メルキセデクやヨブの存在を知ると、当時、アブラハムより優れた家系があったようにすら思われるからです。

ともあれ神は、アブラハムの家系を選び、これを導き教え、神の救いの働きに役立つために、育て上げようとなさったのです。その教育と指導の書が律法なのです。従ってこれは明らかに、アブラハムの子孫であるイスラエル民族に限って与えられた、特別な律法です。他のどんなな民族にも適用されてはならないものです。

原則的に、イスラエルに与えられた律法も、神に似せて造られた人間の本源的姿としての律法と、矛盾するものではありません。同じ神から出ている二つの律法です。ただ二つ目の律法は、全人類を対象としたものではなく、救いの働きの器として選ばれた、特殊な民族の特異な事情に対して与えられたものであり、全人類にはそのまま当てはめることが出来るものではありません。旧約聖書の戒律すなわち律法は、その原則を注意深くたどるならば、必ず全人類に与えられた基本的律法、心に記された律法に行き着きます。同じ神から出ている律法なのですから当然です。しかしイスラエル民族の特殊性、その特異な環境と必要性から、彼らに与えられた律法は、まるで、全人類に与えられた律法とは相反するものであるかの様に、思われることさえあるのです。

西欧キリスト教は、このイスラエルに限って与えられた律法を、あたかも自分たちに与えられたものであるかのように理解し、受け取りました。そこに書かれている戒律を、そのま

ま自分たちの戒律にしたばかりか、自分たちに都合よく改ざんまでしてきました。旧約聖書に記されている出来事を、自分たちの社会に適用し、戦争を正当化し、武力による他民族、他国家の支配を正当化し、植民地政策を当然のこととしました。王制や奴隷制度も、何の疑いもなしに取り入れました。当然、他宗教を奉じる民族を滅ぼすことは、この上ない正義の様に取り扱われ、モスリムを始めとする多くの宗教が弾圧されました。宗教裁判が行われ、魔女狩りが行われ、社会のあらゆる分野に、教会の支配が行き渡りました。そして教会は自分の伝統に固執し、その支配の手綱を緩めようとはしませんでした。

ところが今、この伝統的キリスト教社会、西欧のキリスト教社会の教会が、軒並みに弱体化しています。人々がもう教会に背を向けてしまったのです。そこには人間を大切にする風潮が、大きく関わっています。いわゆる文芸復興、ルネサンスが大きな力となり、人権が高揚され、自由が叫ばれ、平等や正義が高々と謳われ、教会の古い伝統、旧約聖書の教えに立った権威主義に対抗したのです。

今、人権を謳い、人間性を高々と掲げる人々の多くは、神が人間を創造された時、ご自分に似せてお造りになった、事実の大切さを持ち出しているのです。ただ彼らはそれに気づいていないだけです。彼らが高揚し謳い叫ぶ人間性は、聖書の最初の部分に明確に教えられている、人間が神の性質に似せて造られたという、事実に起因するのです。また神に似せて造られた人間の本性は、理性によって、言葉によって定義されるようなものではなく、人間の本能的奔流から出てくるものであるために、まだまだ統一した理論的一致や、方向性さえ見えてこないところもあります。

しかしはっきりしているのは、伝統的キリスト教は間違っているという、感覚です。だから多くの西欧の人々は、自分たちがキリスト教社会に生きていることを認め、自分たちがキリスト教徒に分類される人間であったとしても、もう教会には行かないのです。教会の教えに頷づくこともありません。彼らは、人間として、もっと正しく生きたいと感じているのです。それが、旧約聖書を自分たちに与えられたと理解して成り立っている、教会の教えと権威の否定となり、神の姿に似せて造られた人間としての性質の高揚、人間の本性の叫びなのです。

現在キリスト教徒が増加しているのは、近代的な物事の理解からは取り残されて生きて来た、いわゆる発展途上国の国々です。かれらは伝統的なキリスト教会が、いかに醜い歴史を作りあげて来たか、いかに非人道的なことを繰り返してきたかということについては、ほとんど知りません。彼らがいま聞くことができる、福音と呼ばれるキリスト教の教えは、人間性を重んじるように姿を変えてきた、近代的キリスト教の教えです。ただし、この近代的キリスト教の教えであっても、本質的には、旧約聖書を自分たちに与えられた神の律法と理

解している、誤った教えであることにかわりありません。ですから、急速に理解力を増している新しいクリスチャンたちの間にも、古い権威主義的な教会に対する不信が広がっているのです。

## 日本における惨状

日本におけるキリスト教は、歴史的に見るならば、16 世紀に渡来したカトリックのキリスト教も、１９世紀にもたらされたプロテスタントキリスト教も、この人道主義に彩られたキリスト教でした。日本に最初に訪れたカトリックの宣教師たちは、ルターなどによるプロテスタント運動によって触発され、あくまでもカトリック教会の内部に留まりながら、教会を刷新して行こうという気概に溢れた、イエズス会に所属する人たちでした。彼らは、今から見るならば古い人たちですが、人道的な気概に溢れた人々であったために、たちまちのうちに、多くの日本人信徒を獲得することが出来ました。しかし、彼らに続いて入って来た他の修道会の宣教師たちは、カトリックの伝統的な悪習をそのまま引き継ぐ人たちでした。秀吉や家康、さらに第三代将軍家光で頂点に至るカトリックの迫害は、この伝統的カトリック・キリスト教に対するものであり、イエズス会からすると、とばっちりを受けたとさえ言えるものです。

ちなみに、当時の日本のキリスト教宣教に、大きな力となったイエズス会ではありましたが、カトリックの腐敗を内部から正そうとする彼らの立場は、当然、厳しいものでした。とは言え、イエズス会に属する者は２万人に及び、修道会としては、もっとも強い影響力を持って活動しています。ただし、高い志を持って始まったイエズス会も、結局はポルトガルやスペインの植民地政策の手先となって活動していたことは事実であり、次第にカトリックの悪に染まって

３００年ほども遅れて日本に入って来た、プロテスタントキリスト教は、主にアメリカと、イギリスからのもので、いわゆる福音的なキリスト教であり、人道的な感覚、ルネサンスの風潮を色濃く持ったキリスト教でした。その教育分野、医療分野、福祉分野などにおける貢献は非常に高いものです。それにもかかわらず、日本におけるプロテスタントキリスト教も、カトリックと変わらず、日本社会全体から見るならば、ありがた迷惑な存在として入ってきました。明治政府は和魂漢才と言う古い諺を和魂洋才と言い換え、キリスト教を止めるための要塞としました。当時の日本の為政者たち、あるいは日本社会全体は、明らかにキリスト教を嫌ったのです。

日本人は、人道主義の衣を着たキリスト教の衣の下の姿を、早々と喝破していたのです。

薩長の若者たちの指導者は、香港におけるキリスト教国イギリスの、植民地支配の非人道的な実態を見て失望しています。明治初期にイギリス留学をしようとして、各地のイギリス領の港を回った後の為政者たちは、行く先々でのイギリスの植民地支配の非人道性を見て、失望し、イギリスに対する憧憬を放棄し、かえって恐れを大きくしました。彼らはわずか２～３０年前に、イギリスが起こしたアヘン戦争の理不尽さと非人間性を学びました。

　アメリカのキリスト教に対しては、イギリスほどの脅威を持った形跡はありませんが、彼らのキリスト教が持つ独善性、キリスト教だけを優れた宗教とし、他のすべての宗教や文化や習慣と言うものを罪悪視し、激しく責め立てる白黒だけで灰色を認めないキリスト教を、ひどく嫌ったのです。旧約聖書の教えを自分たちの手に取り、他者の生き方や宗教、社会通念、風習や習慣をことごとく否定し罪悪視しながら、自らの罪悪性を糊塗するキリスト教を憎んだのです。日本の社会は白黒の社会ではなく、灰色の社会なのです。

　たとえば人種問題一つを取りあげてみましょう。元々、誤って単一民族であると言われたりした日本人に、人種差別と言う意識はありませんでした。せいぜい日本人たちの間で、それぞれの出身地を差別する意識はありましたが、広範囲な人種差別には発展しませんでした。鬼ガ島で退治された鬼は、あるいは、難破した西洋の船の乗組員だったのかもしれませんが、人種差別とは言えません。織田信長は黒人奴隷を買い取って家来にし、大いに喜びましたが、人種差別はおきませんでした。

　しかし、西欧キリスト教国では人種差別は当たり前だったのです。ちなみにペリーが日本に来てから６年ほど後に（１８５９年)、アメリカの司法長官カレブ・カッシングが、マサチューウセッツ州議会で大喝采を受けた、有名な演説を引用しておきましょう。

**「私たちは、優れた白色人種に属しています。すなわち、男性としては知性の、女性としては美の完全な具現です。それこそが力と特権であり、いかなるところに行こうと、また留まろうと、そこに住む人々をキリスト教化し、文明化し、私たちに服従することを命じ、征服し、君臨する権力と特権を所有しているのです。私は、自分の血と人種である白人が、イギリスのサクソン人であろうと、アイルランドの血を引くケルト人であろうと、同格であると認めるものです。とはいえ、米国のインディアンやアジアの黄色人種やアフリカの黒人が、私と同格であるとは認めないものです。」**

　西欧キリスト教諸国では、このような人種差別を自明の理として受け入れ、植民地政策や奴隷制度を当然としてきたのです。それはカトリックでもプロテスタントでも同じです。しかし、このようなキリスト教の教えは、人間の本性から発する、つまり、神に似せて造られた人間の特性から萌え出る人間観、人権、自由、平等、正義、哀れみ、愛、同情、すなわち人間性の高揚と真っ向から衝突したのです。聖書の教えと真っ向から衝突するキリスト教

の教えは、聖書を信じるクリスチャンたちから排斥されたのではなく、聖書を知らない人々から排斥されたのです。

日本人は聖書を知らない人々です。しかしその日本人が、国際会議で人種差別撤廃を最初に訴えたのです。欧米キリスト教諸国は、アジアで大きな力を持ち始めた黄色人種の国、日本を喜ぶことも、そのまま認めることもできませんでした。それで、アメリカやイギリス、そしてソ連までも巻き込んで、資源に乏しい日本に対し、理不尽な封じ込め作戦を展開して、日本が真珠湾攻撃打って出なければならないように、おぜん立てをしてたのです。明らかな白人優位主義です。それで八紘一宇（すべての人間を一つの家族の様に）を標語にして、アジア諸国を白人の植民地政策から解放しようという、日本の大東亜戦争は、太平洋戦争に変えられてしまったのです。

今だに、大多数の日本人は、マッカーサーによる日本統治の、日本を戦争の自責の念に落とし込み、二度と西欧諸国に対して（特にアメリカに対して）戦争を起こさないようにという、偽情報の教育作戦に支配されたままです。（War Guilt Information Program という GHQ の作戦を調べてみてください。）いわゆる自虐史観の中に閉じ込められたのです。日本が戦争の出来る国になれと言うのでも、アメリカと敵対せよというのでもありません。しかし、アメリカの偽情報によって、自虐の歴史観しか持てずにいる日本からは、脱却しなければなりません。

国家としての日本は、アジアを侵略しようとしたのではありません。白人支配から解放しようとしたのです。幸い、日本は戦争には負けながらも、結果として、アジア諸国の白人支配を終わらせることが出来ました。アフリカ諸国の植民地も、不完全極まりないとはいえ、理念上は撤廃させることが出来ました。日本は戦争には負けましたが、人種差別には勝ったのです。アメリカでもイギリスでも、多くのヨーロッパ諸国は、未だに人種差別の問題に苦しんでいます。

日本はキリスト教が嫌いな国です。でも、キリストの教えには感動する日本人がたくさんいるのです。キリストの教えには深い感動を覚えながら、キリスト教会には失望するのです。キリスト教会の多くは、西欧のキリスト教と言う宗教を教えて、本当のキリストの教え、あるいは聖書の教えからは、遠く隔たったところが多いためなのです。

私たちはいま、聖書が教える神の姿に似せて造られた人間性を、単なる人間性の高揚としてではなく、神に似せて造られたという、基本を大切にして生きるクリスチャンになりたいものです。そして、罪を犯した人間を救済するための手段としての、イスラエル民族の選定と、彼らに与えられた旧約聖書の律法の大切さも理解していきましょう。

人間性だけを高揚し、人権だの自由だのを無制限に主張し出すと、LGBTQ の問題の様に、際限なく、留まることを知らない議論に陥るのです。人間の自由、人間同士が愛し合うという美しい文言に騙されるのです。聖書の教えは、まず神と人間の関係を第一にすることです。神との正しい関係を第一にすると、ＬＧＢＴＱのよう問題は起こらないのです。人間にとって、神の御心に従い、神に喜ばれるように生きるのが、最も大切なことだからです。

人間の真の姿

人間の真の姿、すなわち本性は、人間が天地創造の神の御姿に似せて造られた、その事実によって定められました。人間は、基本的に、神に似ているのです。その神に似た人間の本来の姿こそ、人間が人間として生きていくための、基本的な定め、あるいは法則、法律となっているのです。人間が家庭を構成し、地域社会を作りあげ、国家を形成し、その共同体の中で生きていくための基本的要素が、そこに与えられています。神が人間をお造りになったとき、そのような能力、本性を持つものとして造ってくださったのです。

その神に似た性質こそ、律法を与えられていない異邦人の心にも記されている律法と、パウロが語っているものであり（ローマ書２：１２）、文字で書かれた律法を持っていない異邦人も持っている、自分自身と言う律法であり、心に記されている律法なのです（２：14 - 15)。異邦人はユダヤ人とは異なっていて、文字で書かれた律法は与えられていません。しかしパウロがはっきりと語っているように、異邦人も律法を与えられ、それを堅持しているのです。それが、神に似せて造られた姿であり、人間の本性です。

神に似ているというのは、神と同じだというのではありません。あくまでも似ているだけにすぎません。神はあらゆる意味で無限の存在であり、人間はあくまでも有限に過ぎず、神とは決定的に異なっています。しかし、神の性質、すなわち神の属性が、人間にも与えられているのです。それはまず、人間は動物でありながら、神に似た霊的な性質を持つことです。人間が霊的な存在であると言うことが、人間を最も際立つ存在とするもので、人間であることの証明です。このような性質は、他のどのような動物にも与えられていない、人間だけの特質です。人間が神に似た霊的な性質を与えられたことは、霊そのものであられる神とコミュニケーションを持つことが出来る、神と交わり、神を礼拝し、神に感謝し、神を喜ぶことが出来るということです。

また人間が神に似せて造られたことは、人間が神に似た清い性質を持ち、正しさを求め、公平を愛し、他人の幸せを喜び、助け合いながら生きることを、喜ぶように造られていると

いうことです。人が他人の命を尊び、そのために尽くすことは、神の性質の写しなのです。神があらゆる善性を帯びておられるために、人間も善性を帯びたものとされているのです。

この、神とコミュニケーションを保ちながら生きることと、あらゆる善性を活かしながら共に生きるという二つの面が、全ての人間の基本的な生き方として、造られたときに与えられているのです。人間は造られてからしばらくの間、この心に記された律法によって、自分を制御しながら生きていました。アダムとイヴが罪を犯して神に反抗し、神の許を追放されるまでは、この人間の本質に従って、美しく生きていました。罪を犯して神を離れてしまった後も、この人間の本性は失われてしまったわけではありません。そのようなことは、聖書のどこにも記されていません。

ただ、罪を犯し神の許を追放されてしまった人間は、基本的に、神との交わりを絶たれてしまいました。人間が命の木への道に戻ることが出来ないように、ケルビムと回る炎の剣が置かれたという創世記３：２４の記述は、人が神の許に戻ることが出来なくなった、罪を犯す前に持っていた自由な交わりが出来なくなったことの、象徴的な表現であると理解できます。ただし、神との交わりが完全に断たれたのではなく、神の側から最小限の語りかけと導きがあり、人間がそれに応答することが出来たのは確かですが、神との霊的交わりは著しく妨げられ、霊的命の流れも失われてしまいました。葡萄の木から切り落とされた枝のように、命を失うことになったのです。こうして人間は、悪魔の支配に下り、罪の力に捕えられて生きる運命になりました。悪魔の支配に陥った人間は、そのような環境で社会を形成し、子を産み育てることになりましたが、そこに生まれた人間は、当然、悪魔の支配の中に生まれたのであり、生まれながらに霊的には死んだ状態で、生まれてくることになったのです。動物としては生きていたとしても、神に似せて造られた霊的な存在としての人間は、すべて死んだものとされたのです。ですからキリストは一度だけ生まれた者は、新しく生まれ変わらなければならないと教え、悪魔の国と言われる悪魔の支配から、神の支配である神の国に生まれ変わらなければならないとおしゃったのです。

罪を犯して悪魔の支配に陥った人間は、そのあとも長い間、動物としての命を長らえ、ノアの洪水やバベルの塔のような、大変な出来事を体験することになりました。この間も、人間の霊的性質が完全に消滅してしまったのではなく、不明瞭ながらも神を呼び、その助けを願った形跡も残っていますが、神についての人間の記憶はますます曖昧になり、偶像礼拝がはびこり出したと想像できます。パウロがローマ書の第一章で語ったような、偶像礼拝とそれに続く大混乱が起こったのです。

律法の賦与

神を離れて久しくなると、人間の霊的本能としての神意識は、僅かに残っていたとしても、神の姿の記憶はすっかり曖昧になってしまいました。そこでパウが、ローマ書 1：18 以降で語っている通りの、偶像礼拝が興り、神の怒りの裁きがそれに続き、人間の性的退廃と多くの罪が蔓延するようになり、人間社会の堕落は坂道を転げ落ちる石のように、勢いをましたのです。